歴史地理学　47－1（222）1～3　2005.1

「宗教文化の歴史地理学」特集号にあたって

小　田　匡　保

「歴史地理学」第47巻第1号（通巻第222号）は，シンポジウム「宗教文化の歴史地理学」特集号である。昨年の第46巻第1号（通巻第217号）も共同課題「宗教文化の歴史地理学」特集号であり，5本の論文が掲載されているが，本号は2004年7月4日に松江市の島根県民会館で行なわれた同名の大会シンポジウムの報告的性格を持つものである。

筆者は，後の「趣旨説明」にも記すようにこのシンポジウムのオーガナイザーを仰せつかり，その結果，本号もほぼ筆者1人で編集を担当することになった。シンポジウムについては，当日筆者の述べた「シンポジウム趣旨説明」を後に掲げておくので，以下においては，「ゲスト・エディター」（そういう規定はないが）の役目を担った者として，本号の編集について記しておきたい。

シンポジウム特集号という性格上，大会終了後，発表者とコメンテーター，座長に原稿を依頼した。例年とは違い，今回は座長にも所見をお願いした。これは，同じテーマについてより多くの方にコメントしていただき，議論を深めようと試みたためである。多忙の中，また体調を崩された方もいた中で，全員の方から原稿をいただくことができたのは幸いであり，この場を借りて深謝申し上げたい。ただ，原稿が揃うのが遅く，筆者の編集作業の遅れもあって，発行が本来の予定を大幅に過ぎたことは，会員各位ならびに早く原稿をいただいた方に大変申し訳なく思う。

本号の内容は，5本の報告論文とそれぞれに対するコメント・座長所見，全体に対する総合コメント2本，それに，筆者のシンポジウム総括（当日は時間の都合でかなり省略したが）から成っている。

小野寺報告は，伊勢講の変容を，近世後期から現代に至るまで非常に長いタイムスパンの中で追跡した労作である。聞き取り調査のみならず講文書を丹念に分析して，明治中期と高度経済成長期における講の変容を，地域の経済的・社会的変化の中でとらえようとしている。

松井報告では，信仰圏研究の要点を整理した後，金村別雷神社の事例によって，第1次信仰圏と第2次信仰圏の性格の違いが述べられている。既発表の内容が中心なのは残念であるが，近年研究の多い信仰圏について要領よくまとめられている。

岡報告は，出雲大社の門前町杵築の概要説明と，出雲大社近郷を描いた3種の絵図の分析からなる。史料をふんだんに用いた地元研究者ならではの成果とも言えるが，シンポジウム当日に質疑が出なかったのは，史料に基づいた細かい話が，予備知識や土地勘のない者にはむずかしかったこと，地理学研究者になじみのある絵図の話があまりなかったことがあるのかもしれない。

渋谷報告は，風水の「形法」，「理法」という考え方について分かりやすく説明し，朝鮮時代の地誌・地理書で，「形法」の用語がどのように現れてくるかを紹介している。風水は基礎知識がないとなかなかとっつきにくい概念であるが，渋谷報告は門外漢にその重要性を知らしめる示唆に富んだものである。

5番目の稲田報告は，イギリス南部の墓地・葬制の変容について述べ，その背後にある人々の意識の変化についても考察している。オリジナルの調査の部分が少なく，既に他書に公表されている内容であるのも残念だが，日本ではあまり知られていない現代イギリスの墓地・葬制事情についての興味深い報告である。また，アメリカの墓地・葬制に言及する中川のコメントが議論を立体的にしている。座長・土居の所見にもあるとおり，非常におもしろいテーマであったにもかかわらず，シンポジウム当日フロアからの質疑が皆無だったのはまったく意外であった。

最後の総合コメントでは，個別の報告に対するコメントにとどまらず，大所高所からの意見もいただくことができた。

以上のように，シンポジウムの限られた時間の中で，宗教文化の歴史地理学に関するいくつかの重要なテーマはおさえられたものと考える（もちろん，漏れ落ちているものがたくさんあることも事実ではあるが）。シンポジウムのオーガナイザー，特集号のゲスト・エディターとして，このシンポジウムと特集号が，今後の研究にいささかでも寄与できることを期待したい。

最後に，末筆ではあるが，シンポジウム「宗教文化の歴史地理学」および特集号に関係されたすべての方々に感謝申し上げる。

（駒澤大学文学部）

シンポジウム趣旨説明

昨年度の共同課題「宗教文化の歴史地理学」に引き続いて，今年度の大会では同名のシンポジウムを開催することになった。はじめにオーガナイザーとして，シンポジウムの簡単な趣旨説明とこれまでの経緯を述べ，例年とは多少違うシンポジウムの進め方について述べておきたい。

宗教については，歴史地理学に関係のある興味深いテーマでありながら，これまで歴史地理学会では共同課題として取り上げられることがなかった。しかし，近年，地理学界の中で宗教に対する関心が高まっており，歴史地理学会においても，大会・例会や会誌『歴史地理学』で，宗教関係の発表や論文をしばしば見かけるようになった。

これを受けて歴史地理学会では，平成15・16年度に「宗教文化の歴史地理学」という共同課題を設定することを決定した。昨年度の大会では，共同課題「宗教文化の歴史地理学」に10名の方の発表があり，そのうち5名の方の発表は，2004年1月発行（奥付）の会誌第46巻第1号の共同課題特集号に掲載されている。

2年目である今年度のシンポジウムについては，常任委員会より不肖私がオーガナイザーの任を命じられた。当初は，岐阜聖徳学園大学の田中智彦先生にも私からオーガナイザーをお願いし，私と2人で計画を練ったが，田中先生は2002年12月に急逝され，結局私1人でオーガナイザーを務めることになった。

昨年度は発表者を一般会員から募集し，発表テーマも多岐にわたったが，今年度のシンポジウムでは，オーガナイザーのほうで宗教文化の歴史地理学に関わる5つのテーマを設定し，非会員も含めてテーマにふさわしい方に発表・コメント・座長をお願いすることにした。発表の順番に挙げると，①村落内の宗教組織（小野寺），②宗教地理学の研究動向（松井），③門前町（岡），④風水（渋谷），⑤墓地（稲田）である。現在の研究動向に鑑みれば，社寺参詣・巡礼についても発表がほしかったが，これについては伊勢講に関する①の小野寺氏の発表が多少それに触れる面がある。また，最近研究の多い信仰圏については，②の松井氏の発表がそれをカバーする。さらに，絵図を使った研究も近年増加しているが，③門前町の岡氏の発表はまさにそれに

該当する。なお，④風水，⑤墓地については，厳密には宗教と言いかねる面もあるが，風水は環境認識の１つのあり方として宗教に通じる面があり，墓地も宗教意識の反映されたものが多いことから，本シンポジウムでは宗教を広い意味に解釈して，これらをシンポジウムのテーマに含めることにした。

事例研究のフィールドについても，国際的な比較検討の議論ができることを意識して，可能な発表者には海外の事例報告をお願いした。フィールド別に見ると，発表①～③は国内の研究，発表④と⑤は海外（朝鮮半島とイギリス）の研究である。

なお，今年度の大会は，地元の島根地理学会・島根県教育委員会・松江市教育委員会・島根史学会との共催であり，シンポジウムについても，地元の研究者である島根県立博物館の岡氏の発表を織り込ませていただいた。

次に，シンポジウムの進め方について説明しておきたい。過去のシンポジウムと大きく異なるのは，最後の総合討論をとりやめたことである。そのかわり，個別の発表の後にコメンテーターからの質問・意見を受け，その後，発表者，フロア，座長の間で意見交換を行なうことにした。時間は，発表30分，質疑応答25分を予定している。通常の研究発表に比べて，質疑応答の時間をかなりとり，充実した議論ができることを期待している。言い換えれば，従来のシンポジウムに比べて，５つの発表を５つのセッションとして半分独立させようというのが今回の試みである。ただし，全体としてのまとまりをつけるため，最後に２人の先生に広い視点から総合コメントをいただくことにした。千田先生には人文地理学・歴史地理学全般の面から，鈴木先生には文化人類学・民俗学・宗教学の専門家として地理学の外の視点からのコメントをお願いしたいと思う。

最後に，大会実行委員会，学会事務局をはじめとして，今日のこのシンポジウム開催の準備にあたられた関係者・参加者の皆様にオーガナイザーとして感謝申し上げる。

Guest Editor's Introduction to the Special Issue on Historical Geography of Religious Culture

ODA Masayasu (Komazawa University)

This Special Issue is based on the Symposium on Historical Geography of Religious Culture held at the 2004 Annual Meeting of the Association on July 4th, 2004 in Matsue City. It consists of five articles with two comments on each, two comments on the whole Symposium and the conclusion. Themes dealt in the papers are religious organization in the community, pilgrimage, worship catchment area of the shrine, temple town, pictorial map, feng shui, cemetery, and so on. The Editor wishes the Special Issue would contribute to the progress in this research field.